A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

ドストエフスキイ

悪　霊 II　　池田健太郎訳

中央公論社

新集 世界の文学 16 ©1960

ドストエフスキイ

訳者 池田健太郎

昭和44年11月5日初版発行
昭和49年5月31日再版発行

発行者 高梨 茂

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

悪霊 Ⅱ

第六章　ピョートルの奔走　5
第七章　仲間のあいだで　61
第八章　イワン王子　91
スタヴローギンの告白　106
第九章　スチェパン氏、家宅捜索さる　159
第十章　海賊たち。運命の朝　171

第三部

第一章　祭り。――第一部　200

第二章　祭りの終わり　235
第三章　ロマンスの終わり　273
第四章　最後の決議　304
第五章　旅の女　336
第六章　苦難にみちたひと夜　377
第七章　スチェパン氏の最後の放浪　419
第八章　むすび　463
年譜　481

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

悪霊 II

第六章　ピョートルの奔走

一

祭りの日取りは最終的に決まったけれども、県知事フォン＝レムブケー氏はますます悲しげに憂い顔を見せるようになった。奇妙な、なんとも不吉な予感が胸いっぱいにひろがっていた。さすがのユリヤ夫人までがそれを見て、はげしい不安を感じたほどである。じっさい、すべてが順調だったわけではない。温厚な前知事は必ずしも県政を立派にととのえて職を去ったわけではなかったし、いまはコレラの脅威が迫り、土地によってはたちの悪い獣疫が発生していた。また夏じゅう町や村では火事が猛威をふるい、民衆のあいだには放火ではないかという馬鹿ばかしいつぶやきがだんだんと根をおろしていった。強盗事件も以前に比べて倍にふえた。もっともこうしたことはすべて、当然のことながらむしろ普通のことであって、それに付随したもっと重大なさまざまな原因が、それまでしあわせに過ごしてきたレムブケー氏の平安をぶち破ったのである。

ユリヤ夫人がいちばん驚いたのは、夫が日一日と無口になって、奇妙なことに何かと隠し立てをするようになったことであった。いったい彼に隠し立てをしなければならないことがあるのだろうか。じっさい彼はいままでめったに彼女に逆らわなかったし、たいていの場合にはなんでも彼女の言いなりになっていた。たとえば彼女の強い要求によって、知事の権限を強めるための、きわめて冒険的な、法令違反すれすれの二、三の措置が講ぜられたこともある。また同じ目的で、何度か悪事が見逃されたこともある。たとえば裁判にかけられてシベリア流刑になるはずの連中が、彼女の横車で逆に褒賞を受けるように推挙されたのである。ある種の請願や質問を受けた場合には、一貫して黙殺することに決められた。これらのことはすべて、のちになって明るみに出たことである。

レムブケーはただ盲判を押していたばかりではなく、

職務の遂行に妻がどの程度まで口を出していたか、まるで考えもしなかった。そのかわり、ときどき《ほんのつまらないこと》でとつぜん叛旗をひるがえして、ユリヤ夫人の度胆を抜くことがあった。もちろんそれは何日も服従をつづけたあとで、ちょっとした謀反の瞬間を味わいたいという欲求を感じたときのことである。残念ながらユリヤ夫人は、あれほど鋭い洞察力を持っていたのに、高潔な性格の中にはえてしてこういう高尚な繊細さが秘められていることを見抜くことができなかった。ああ！いまの彼女はそんなことにはかまっていられなかったのだ。そうしてそのために多くの誤解が生じたのである。

ある方面の事柄については、私などが語るべき筋合いではないし、第一、私などに語れようはずもない。また行政上の過失についてうんぬんすることも、同じように私の任ではない。もともと行政面の事柄については、私はまったくふれないできている。この物語を書きはじめたときに私が意図したのは、別の課題だったのである。それに現在この県に派遣されている司直の手が、いずれ多くの事柄を明るみに出してくれるはずだから、もうしばらく待てばいいわけである。もっとも、やはり二、三の事柄だけは説明をはぶくわけにはいかない。

しかしもうしばらくユリヤ夫人の話をつづけようと思う。この不幸な婦人は（私は彼女に心から同情している）、矢も楯もたまらずに欲しいと思ったすべてのものを（名声その他）、何も最初から（あんなにはげしく）常軌を逸したふるまいをしないでも、十分手に入れることができたはずなのである。ところがつい詩情が多すぎたためか、それとも若いころに長いあいだ恵まれぬ悲しい日々を送ったためか、彼女は境遇が変わるやいなや、とつぜん自分を何か特別の使命をおびた人間か、《頭上に炎なす舌をかざす》聖なる女王ででもあるかのように感じた。そうしてわざわいはその炎なす舌にあったのである。もともとその舌は付け髭とはちがうから、どんな女性の頭上にもかざされるわけではない。しかしこのわかりきった真理を世の女性に納得させるのは何よりもむずかしい。いっそ相手が女性ならば、相槌を打っておけば成功間違いないのである。そこで人々は先を争って彼女に相槌を打った。あわれな婦人はまたたくまにさまざまな影響の玩弄物となった。と同時にわれこそは独創的な女性なのだとすっかりうぬぼれてしまったのである。

ユリヤ・ミハイロヴナが知事夫人の座におさまっていたのはほんのわずかな期間だったけれども、そのあいだにおおぜいの手練手管に長じた人々が彼女の周囲にむらがって私腹をこやし、彼女の単純さをまんまと利用した。しかも自主独立という美名のもとにどんなでたらめが横行したことだろう。大地主制度も、貴族的要素も、県知事の権限強化も、民主的要素も、新しい諸制度も、秩序も、自由思想も、社会主義的な考え方も、貴族的サロンのいかめしい作法も、彼女を取り巻く青年層のほとんど居酒屋的な無遠慮さも、何もかもが彼女の気に入ったのである。彼女は自分が幸福の天使となって、和解しがたいものを和解させようと夢想した。いや、正確に言えば、自分個人を崇拝させることによってすべての人々を、すべての事柄をひとつにまとめようと夢見たのである。彼女はまたお気に入りの連中を持っていた。ピョートル・ヴェルホーヴェンスキイなどは、わけても見えすいた追従を並べて寵愛を一身に集めていた。もっともピョートルが寵愛を受けた理由はほかにもあって、それはこの不幸な婦人の特徴をまざまざと描き出す驚くべき理由なのだけれども、ユリヤ夫人はいずれピョートルがきっと国家的な大陰謀を自分にだけはそっと教えてくれるにちがいないといつも期待していたのである。まったく想像もできないような話であるが、事実そうだったのだ。彼女にはなぜか、国家的な陰謀がこの県内でひそかにたくらまれているにちがいないという気がしていたのである。

いっぽうピョートルはある場合にはわざと黙りこくって、ある場合にはそれとなくほのめかしてみせて、この奇怪な考えが彼女の心に根をおろすように仕組んでいた。するとユリヤ夫人のほうでは、ますます彼をロシアじゅうの革命的な動きと関係のある人物と想像して、そういう人物がすっかり自分に心服しているのだと考える。陰謀の発覚、ペテルブルグから寄せられる感謝、将来の出世、崖っぷちで引きとめるために青年層に差し伸べる《愛の手》の効果――そうしたさまざまな絵図が、空想好きな彼女の脳裡にあざやかに描き出される。自分はあのピョートルでさえ救ったではないか、ピョートルでさえ手なずけたではないか（なぜか彼女はそう思い込んでいた）、とすればほかの連中も救えないはずはない。あの連中はだれひとり決して破滅しないだろう、自分がひとり残らず救ってみせる、彼らを分類して、報告してや

る、自分は最高の正義のために行動するのだ、ことによると、歴史とロシアのあらゆる自由主義が自分の名前を祝福してくれるかもしれない。そうしていっぽうやはり陰謀は未然に発覚する。まさに一挙両得ではないか。

それにしても、せめて祭りの前だけでも、県知事である夫にもう少し明るい顔をしてもらう必要があった。なんとしてでも彼の気持を引き立てて、安心させなければならない。そこで彼女はピョートルを夫のところへ差し向けて、彼一流の治療法によって夫の憂鬱を吹き飛ばそうと思ったのである。ひょっとすると、なんらかのいわば最新情報が鎮静剤の役目をはたすかもしれない。彼女は彼の如才なさに大きな期待を寄せていた。ピョートルはこのところ久しくフォン＝レムブケー氏の書斎にはいったことがなかった。彼はさっそく知事の書斎へ飛び込んだが、それは折から《患者》が特に鬱屈した気分に落ち込んでいるときであった。

二

実はある一連の難事件が起こって、それがフォン＝レムブケー氏にはどうにも解決ができなかったのである。

ある郡内で（そこはつい最近ピョートルが酒宴をもよおした例の郡であるが）、ひとりの少尉がその直属の上官から口頭で譴責を受けた。この譴責はたまたま中隊全員の面前で行なわれたのである。その少尉は近ごろペテルブルグから赴任して来たばかりの男で、日ごろから口数が少なく、気むずかしい顔をして、見たところ重々しい様子をしていたけれども、まだ若い、小柄な、ずんぐり太った、頬の赤い青年であった。ところが彼はその譴責が気に入らなかったとみえて、やにわに中隊じゅうがびっくりするような思いがけない金切り声をあげると、野獣のように頭を下げて中隊長におどりかかった。そうしていきなり相手を殴りつけると、力いっぱい中隊長の肩にがぶりと嚙みついたのである。みんなはやっとのことで彼をもぎ放した。少尉はたしかに発狂したのである。少なくともものちに判明したところによると、彼は近ごろ常軌を逸した奇妙な挙動を見せていたのである。たとえば下宿の部屋にあった家主の聖像をふたつとも外へ放り出して、そのひとつを斧でたたき割ってしまったというし、また自分の部屋に三つの台を教会の聖書台に似せて置き、その台の上にフォークト、モレスコット、ビュッ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ヒナー*の著作を並べて、そのひとつひとつの前に燈明をあげていたともいう。かなりの分量の本が部屋で発見されたところから見ると、彼はなかなかの読書家であったらしい。もし五万フランほどの金があったならば、たぶん彼はゲルツェン氏が『過去と思索』のなかでユーモアたっぷりに書いているあの《陸軍幼年学校生徒》**のように、マルキーズ諸島へでも船出したことだろう。ところがその少尉をつかまえてみると、ポケットや下宿の部屋から、戦闘的なアジビラの束が発見されたのである。

アジビラそのものはこの事件と同じようにつまらぬ問題で、私に言わせれば何もやきもきするほどのことではない。いままでにもどっさり見てきたのである。第一、そのアジビラは新しいアジビラではなかった。のちに聞いたところによると、それとそっくり同じアジビラはつい最近X県にもまかれたそうだし、またひと月半ほど前にその郡や隣の県へ行って来たリプーチンも、そのさいすでに同じアジビラを見たと断言している。ところがレムブケーがショックを受けたのは、ちょうど時を同じゅうしてシュピグーリン工場の支配人が、夜中に工場へ投げ込まれたと言って、少尉の手もとにあったのとまったく同じアジビラを二束か三束、警察へ届けたことであった。アジビラの束はまだ封をしたままだったから、さいわい工場の労働者はだれひとりそのアジビラを見なかったはずである。要するにこれだけの馬鹿ばかしいことにすぎなかったのだけれども、レムブケーはすっかり考え込んでしまった。彼にはこの一件が不愉快に入り組んだ事件のような気がしたのである。

シュピグーリン工場と言えば、ちょうどそのころ例の《シュピグーリン事件》がはじまったばかりで、この事件についてはこの町でもごうごうたる非難がわき起こったし、首都の新聞にもさまざまな尾ひれがついて報道されたものである。三週間ほど前のことであるが、この工

* いずれも唯物論の立場に立った自然科学者で、彼らの著作は一八六〇年代のロシアの無神論者たちに大きな影響を及ぼした。フォークト（一八一七～九五）はドイツの動物学者、モレスコット（一八二二～九三）はオランダの生理学者、ビュッヒナー（一八二四～九九）はドイツの医学者。

** ゲルツェンの『過去と思索』第七部六十六章に、若い移民者の話が書かれている。その話によると、一八五八年ロンドンにいたゲルツェンのところへ、陸軍幼年学校生徒らしいひとりの青年がたずねて来て、三万フランをもってマルキーズ諸島へ渡り、そこに社会主義的なコロニー（植民地）を作るつもりだと語ったという。

場の中でひとりの工員が真性コレラにかかって死亡し、つづいてさらに何人かの患者が発生した。折しも、隣の県からコレラの脅威が迫っていたこととて、町じゅうの人々は怖気をふるった。ついでながら、この招かれざる客を迎えるために、むろん町では万全の防疫措置が取られていた。ところがシュピグーリン工場だけは、工場の所有者が億万長者で、ほうぼうに縁故のある一家だったためであろうか、なんとなく見のがされていたのである。そこで町じゅう大さわぎになって、あの工場こそコレラの温床である、あの工場の中——とりわけ工員の宿舎は前々から不潔をきわめているから、もしいまコレラの脅威が迫っていなかったとしても、あの工場から自然に発生したにちがいないと口々に叫びはじめた。当然のことながらただちに防疫措置が講ぜられて、レムブケーはすぐさまその措置を完了するよう懸命に督促した。工場全体を消毒するのには三週間ほどかかった。ところがシュピグーリン家では、なぜか理由も言わずにいきなり工場を閉鎖してしまった。シュピグーリン兄弟のうち、ひとりは常時ペテルブルグに暮らしていたのだが、もうひとりの兄弟は、当局から消毒の命令を受け取ると、さっさとモスクワへ出奔してしまったのである。支配人は工員の賃銀を清算しはじめた。そうしていまではそのあくどい手口が明らかになっているけれども、ひどいピンはねをしたのである。工員たちは不平を言いはじめ、正当な賃銀を払ってもらいたいと言って、愚かにも警察へ泣きついた。もっとも、べつだん大さわぎをしたわけでもないし、それほど興奮していたわけでもない。支配人の届けたアジビラがレムブケーの手に渡ったのは、ちょうどそういうときだったのである。

さて、ピョートル・ヴェルホーヴェンスキイは、親友か内輪の者のように、案内も請わないでいきなり知事の書斎へ飛び込んだ。第一、きょうはユリヤ夫人から特別の依頼を受けて来たのだ。青年の姿に気づくと、フォン＝レムブケー氏はむっとした顔をして、無愛想にテーブルのそばに立ちどまった。それまで彼は書斎の中を行ったり来たりしながら、知事官房付きの役人ブリュームとふたりで何やらしきりに話し合っていたのである。このブリュームという役人は、彼がユリヤ夫人の猛烈な反対を押しきってわざわざペテルブルグから連れてきた、陰気でひどく無器用なドイツ人である。彼はピョートル

がはいって来ると、戸口のほうへ引き下がったけれども、部屋から出て行きはしなかった。ピョートルは彼が何やら意味ありげに県知事と目配せをしたような気までした。

「ああ、やっとつかまった、雲隠れの知事閣下」とピョートルは笑いながら叫んで、テーブルの上にのっていたアジビラを手のひらでおさえた。「これでまたあなたのコレクションがふえますね」

レムブケーは思わずかっとなった。顔のどこかが、とつぜんひきつったみたいだった。

「やめたまえ、君、やめたまえ」と彼は憤怒のあまりぴくりと体をふるわせて叫んだ。「失敬じゃないか……君……」

「どうしたんです、あなたは。怒っておいでなんですね」

「ひとこと言わせてもらうがね、君、私は今後、君の無礼を我慢するつもりはないから、よく覚えておいてくれたまえ……」

「ちぇっ、いやだなあ、この人は本気で怒っているんだから」

「黙れ、黙れと言ったら」フォン＝レムブケー氏は絨毯の上で両足を踏み鳴らした。「失敬じゃないか……」

事態はきわめて険悪な様相を呈していた。悲しいかな、これにはピョートルはもちろん、ユリヤ夫人さえも知らないある事情がからんでいたのだ。不幸なレムブケーはこのところひどい錯乱状態におちいって、数日来ひそかに妻とピョートルとの仲を嫉妬しはじめていた。とりわけ深夜ひとりでいるときなど、彼はかぎりなく不愉快な瞬間をときどき味わっていたのである。

「しかしですね、僕のほうじゃこう思っていたんです、ある人が二日もぶっつづけに、深夜までさし向かいで自分の小説を読んで聞かせて、しきりに批評を求めているとなると、少なくともその人相手にはしゃっちょこばった礼儀なんか要らないだろうと。……僕はユリヤ・ミハイロヴナからもごく親しい人として出入りを許してもらっています。これじゃあなたの気持がさっぱりわからない」ピョートルはある種の威厳さえ見せてこう言った。

「それはそうとね、あなたの小説を持って来ましたよ」ここで彼は、水色の紙でしっかりと筒形に包んだ大型の重そうなノートをテーブルの上においた。

レムブケーは赤くなって、口をもぐもぐさせた。

「どこで見つかったんだね」と彼はおさえきれない喜びがこみあげてくるのを、それでも一生けんめいおさえながら用心ぶかくたずねた。

「それがですね、こんなふうにまるめてあったものだから、箪笥の後ろにころげ落ちていたんです。きっとあのとき部屋へはいるとすぐ、うっかり箪笥の上へ放り投げたんですね。おととい床を洗わせてやっと見つかったんです。それにしても、あなたは僕に難行苦行を押しつけたもんだなあ」

レムブケーはいかめしい顔をしたまま目を伏せた。

「おかげでとうとうふた晩、寝そこなっちまった。おとといっかったんですが、僕はすぐ返さないで、すっかり読ませてもらいましたよ、といっても昼間はいそがしいんで、夜中にね。そうだなあ、――僕は感心しません。まず思想が僕とちがいます。まあ、そんなことはどうでもいい、どうせ僕は批評家じゃないんだから。もっとも――僕は途中で放り出すことはできなかったが、感心しません。第四章と第五章、あれは……あれは……あれは……いったいなんです。第一、よくまああんなにユーモアを詰め込んだもんですね、僕は、げらげら笑いましたよ。もっとも、あなたはソレトナク（原文フランス語。以下同じ）人を笑わせるのが実に上手ですね。そう、それから第九章と第十章、あそこは全篇が恋物語で、僕には苦手ですが、しかしなかなか効果的です。イグレーネフの手紙にはあやうく泣かされるところでした。もっともあなたは彼を実にこまかく描いておいでです。……いや、あの手紙には感情がこもっています。が、同時にあなたは彼を虚偽の面から描き出そうとしておられる、ね、そうでしょう？僕の推測はあたりましたか。ところであの結末ですが、あそこはあなたを張り飛ばしてやりたいぐらいです。あの結論は何事です。あれじゃむかしながらの家庭の幸福ばんばんざいじゃありませんか。子宝に恵まれ、お金をためて、めでたくしあわせに暮らしましたとさ、ってやつだ。なるほど読者は魅了されますよ、何しろこの僕でさえ途中で放り出せなかったんですからね、しかしだからこそよけい始末が悪いんですよ。読者は相も変わらず愚かなものです、だからこそ聡明な人々がゆすぶり起こしてやらなければならないのに、あなたは……まあ、しかしもういいでしょう、じゃさようなら。こんどうかがうときは怒らないでくださいよ。僕はちょっとぜひお耳

に入れておきたいことがあってうかがったんですが、きょうのあなたは……」

レムブケーはそのあいだに自分の小説を手に取って、樫の木の本箱におさめて鍵をかけた。しかもそうしながらブリュームに目配せして、部屋から出て行くように合図をしたものである。ブリュームはいまいましそうに浮かぬ顔をして姿を消した。

「私はべつにこれと言って、ただ……何しろ不愉快なことばかり起こるのでね」と彼は眉をしかめてつぶやいたが、もはや憤怒は跡かたもなく消えて、そのままテーブルに向かって腰をおろした。「まあ君も坐って、そのお耳に入れたい話とやらを聞かせてくれたまえ。君にはずいぶん会わなかったねえ、ピョートル・スチェパーノヴィチ、ただこれからは君の流儀でいきなり飛び込んで来るのはやめてくれないか、……仕事中のことがあるんでね……」

「僕の流儀はこれしかないんです……」

「わかっているよ、君にはなんの魂胆もないだろうさ。しかしね、面倒な問題と取り組んでいることがあるからね。……まあ、かけたまえ」

ピョートルはどっかとばかりソファに腰をおろすと、いきなりあぐらをかいた。

三

「なんです、その面倒な問題というのは。まさかこのくだらない紙切れのことじゃないでしょうね」と言って、ピョートルはアジビラを顎でしゃくった。「こんな紙切れならいくらでも持って来てあげますよ、X県でいやというほど見てきましたから」

「それは、君があそこの県にいたときのことだね」

「あたり前ですよ、この目で見たんですから。それもカット入りでしてね、上のほうに斧の絵が書いてあった。ちょっと失礼（と言って彼はアジビラを手に取った）、やっぱりそうだ、これにも斧の絵がついている。これですよ、そっくり同じです」

「なるほど、斧だ。見たまえ——斧が」

「なんです、斧を見て胆をつぶしたんですか」

「私は何も斧を見たからと言って……第一、私は胆をつぶしちゃいない。しかしこれには……こういう問題には、いろいろな事情が——」

「ほう、事情がね。あの工場から届けられたということですか。へっ、へっ。ときに、あの工場じゃもうすぐ工員たちが自分でアジビラを書くそうですよ」
「なんだって？」フォン＝レムブケー氏はきっとなって相手をにらんだ。
「そうなんです。あの連中には注意をなさったほうがいい。だいたいあなたは甘すぎますよ、アンドレイ・アントーノヴィチ。小説なんか書いておられるから。このさい必要なのは、むかしふうにやることです」
「むかしふうにとはどういうことだね、いったいなんの忠告かね。工場の消毒はすんでいる。私が命令して、消毒させたのだ」
「工員たちのあいだに暴動が起こるんです。あの連中をひとり残らず鞭でひっぱたくんですね、そうすればおさまります」
「暴動だって？　馬鹿ばかしい。私が命令して、消毒はすんでいる」
「ちぇっ、アンドレイ・アントーノヴィチ、あなたはなんて甘いお人だろう」
「私はね、まず第一に決してそれほど甘い人間じゃないよ、第二に……」レムブケーはまたもやむっとしかけた。彼は何か目新しい話でも聞けるかと思って、いやいやながらこの若造の話し相手になっていたのである。
「やあ、ここにも古いなじみのやつがあるぞ」とピョートルは、文鎮でおさえてある別の紙切れに目をつけて、相手の言葉をさえぎった。それも同じようにアジビラふうの紙切れで、明らかに外国で印刷されたものだったけれども、詩の体裁を取っていた。「ああ、これなら僕はそらで覚えていますよ。『輝かしき人格』でしょう？　ちょっと拝見、やっぱりそうだ、『輝かしき人格』です。この『輝かしき人格』なら、外国にいた時分から知っています。で、どこで見つけたんです」
「君は外国で見たと言うのだね」レムブケー氏はびくりと体をふるわせた。
「ええ、いかにも、四ヵ月ほど前に、いや五ヵ月になるかな」
「しかし君は外国でずいぶんいろいろなものを見たのだね」フォン＝レムブケー氏はじろりと目をむいた。ピョートルは知らん顔をして紙切れを広げると、声をあげてその詩を読みはじめた。——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook